

白い異人館

川端 柳太郎（神戸大学教授）

カメラ／緒方 しげを

にしむら珈琲店からフロインドリーブの方へ折れて、坂を見上げると、異様な光景が目に入った。休日のせいか長蛇の列が上まで続いて、しかも若い女性ばかりでなく、お年寄から家族連れ、地方からの団体客など、とりどりであった。

もとはといえばアン・ノン族から始まつたはずである。そしてその頃から多少おかしくなつてゐた。近所を徘徊するだけなく、どんな人が住んでいるのだろうと、わざと呼鈴を鳴らして立去る人、あからさまに覗く人、果ては庭の中に入影がいて驚かされることもあつたといふ。戦後からこの邸に住んでおられた神戸電鉄の社長小林秀雄氏が亡くなり、奥さんと女中さんだけの生活では確かに不安であつたろう。神戸市が管理を引受けたのは、このような事情もあつた。

北野町界隈で市が公開中の三つの異人館は、それぞれに性格を異にしている。風見鶏の館は重要文化財として保存の目的で教育委員会が管理し、ラインの館はお店として市民生協が経営している。この旧シャープ氏邸は、神戸に散在する異人館のシンボルとして、貿易観光課が白い異人館と命名した。がそれからが大変だったようである。あちこちで何度も道を聞かれるという苦情が出る。北野の派出所でも応接にいとまがなかつた。

私の訪れた日に案内してくれた貿易観光課の谷掛仁子さんは、当時の苦心談を語ってくれた。町の辻々でバン

フレットを配つたり、土曜、日曜にはこの派出所に詰めていたりしたそうだ。

白い異人館はイヴェントルームとしての性格をもつてゐる。シャンソンを聞きながらのディナーショウ、鹿鳴館時代の衣装でのパーティ、各国駐在員の奥さん方の手料理、果てはスノーガンで雪を降らしてのクリスマスマ・ペーティなど盛沢山である。その轟音のおわびやら、ゆっくり星寝もできないとの苦情に、近所も回らねばならない。

わざわざ定期券を買って週二、三度は通つてくるという異人館おじさんの協力もあつた。庭の木の葉を刈つたり、何くれと世話をしてくれる。一階右手の居間に、風見鶏の見える窓がある。これを指摘したのも彼である。

本当は人のあまりいない折に、二階のランダに坐つて、何時間かを過すのがいいのかかもしれない。すでに三〇〇冊にのぼる落書帳には、あこがれの異人館、ここで夢のような時間をすごしましたとか、彼とふたりで来てみたい、一度でいいからこんなところで住んでみたいといふのが多い。

しかし異人館が若い女性だけのものでなくなつた現在では、ムードだけでなく見どころも押えておかねばならない。それで谷掛さんに案内してもらつた。

正門を入ると、まず赤れんが積の煙突と青緑色の屋根瓦、それに壁の白い下見板張りが目につく。その色彩と

形の調和は見事である。左右の張出し窓のデザインも巧みに違えてある。左に目を移すと重層の石垣の下に、珍らしいジャガイモ型の白い石が散在している。小林氏が中国から取り寄せたものだが、すでに半分ぐらいに減っている。

玄関上の欄間のステンドグラス二組は小林家の家紋である。入ると各室の天井など様々なデザインが異つていて、それに気がつく。とくに各室の暖炉やその前飾は、それぞれに凝つてある。たとえば左手奥の書斎のタイルは、中段に日本の風景が描かれているが、日本人の製造ではない。その手前の応接室の暖炉の上には、ムツソリーニから贈られたという大理石の女性胸像がある。

食堂の奥に見えるハッチをはじめ、どことなく生活の香りの漂っているのもこの館の特徴である。二階の珊瑚

びきの浴槽やシャワーも今では珍らしくなった。ただ夏は暑く、冬もことさらに冷えるので、住み心地はいいとはいえない。

ペランダのガラス窓の幾何学模様も階下とは異つている。本来の洋風建築にはこの窓はないのだが、神戸の風土にあわせて、日本の側から思いついたのだろうか。

異人館ガールの話では、この日一時間の入館者は三百人を越していた。一人平均の滞館時間は六分ということがになる。もう少し見てほしい気もするが、それでは外で長時間待っている人に気の毒だ。観光館としてここまで魅力的に成長したが、それだけに悩みも大きい。

それでも明治四年にこの邸を去ったH・シャープ米国総領事、終戦の年に小林氏に譲って去ったドイツ人のことが気にかかるのだが――。

現存異人館のなかで最も美しい「白い異人館」（北野町）



門光鴻氏邸に想う

小松 益喜（洋画家）
カメラ／緒方 しげを

門光鴻氏邸は西隣りのシユエケ氏邸とほぼ同じくらいの大きさで、なかなか広い家であり、煉瓦塀をもつていること、柵つきの渡り廊下がついているという二つの特徴がある。だが、ここはもう一年に一枚ずつ、四、五枚も描いたのだが、その間にこの渡り廊下を人が通るのを一度も見たことがない。多分、東隣りの女中部屋に女中さんが居なくなり、料理も主家で作るようになつたので、人通りが途絶えたのである。

残された特徴である煉瓦塀は、この頃内側へ少々傾いてきたようである。早く修繕しなくては大変だ。

この煉瓦塀はイギリス積である。即ち横面を二つ並べ、その上にコバを出して横に積み、またその上に横面を出して積む。即ち縦縦と一列に敷き、その上に横横と一列に並べてゆく積み方であり、これが最も丈夫な積み方だと考えられる。

この塀には門が二つあり、正門の方が通用門よりも巾が狭い。この塀は台石の高さ一五センチくらいで横長の台石が敷かれ、その上に煉瓦を縦々横々と積み重ねていくのである。それが無計画な道路計画で道路が塀を覆うという結果になつてしまつた。これはこの建物保存上甚だよろしくないものだと思う。なぜなら昔の面影を破壊しているからである。北側の大成貿易の屋上から見ると、南に面した東棟の上にトタン板を棟の形に折り曲げて移したのは非常に残念なことだ。市は費用を補助しても

これを正して修復すべきだと思う。とにかくこの建物は唯一の柵渡り廊下を持つ家として、建物の構成上から言つてもまた大きさから言つても大切なものである。後から押して下にコンクリートで地下をもり上げなくては、いまにどこか壊され倒れるであろう。

この塀は永い間通行する人眺めていたことだろうし、哀しい想い出も楽しい想い出もたくさん持つてゐることと思う。しっかりと昔のままに残したいものだ。

ここで描き出してもう二十年以上にもなるだろう。あらとき青年が中を覗こうと塀の上にのぼり、瓦を一枚割つてしまつた。僕は思わず「コラ！そんなことをしちや駄目ぢやないか！」と怒鳴つた。二、三ヶ月経つて行つて見ると、きれいな瓦に変えてあつた。

約半年かかつて絵が九分通り描け、そろそろ仕上げにかかるうとしているとき、門氏が出て来られて「近いうちに取毀すよ」と言われ「ほんとですか！」と目の色を変えた。門氏があわてて「嘘だよ嘘だよ」と笑いながら第一樓へ向われた。家の方にとっては毎日睨まれてやりきれないだらうと思うと、思わず「どうもすみません」と一人言を言つたことだつた。十年も睨んでると、あそこはなにをする部屋だということまでわかつて来る。渡り廊下を主家の方へ渡つた部屋の一階が風呂場である。こんなことまでわかるようでは写生させるのも考え方だ。

と思われる方もあるかも知れないが、許されよ！

また、門氏邸を描いていたときだつた。前の家の廊下が表へ出ていた。そこは無用のところなので一か年写生をしていたら、その家の従業員が毎月二万円ずつ場所代をよこせと言いに来た。僕にしてみれば思いがけぬ申込みに驚かされた。

昔はどうかお書き下さい、と時たまにはお茶をご馳走になつたりしたものだ。資本主義の悪い面をさまざまと見せつけられる気がして仕しかつた。勿論こちらもご迷惑をかけているから決して腹を立てたわけではない。お礼をするのも当然だと思い、ウイスキーを五本ほど買って行つたことだったが、人間が事物化してくるのは不快なことだ。

かつて門兆鴻氏邸ではお嬢さんの結婚祝いだといつて折箱に入れたお茶菓子を持って来て下さつたり、ペア氏邸前で写生をしていた時にペア氏の奥さんがお菓子を持つて来て下さつたことなど思い出し、当時の人情のこまやかさ、正に隔世の感ありと嘆くのも無理はないと思いませんか。

何はともあれ、早く堺に手を入れなかつたら、いまになつたりしたものだ。資本主義の悪い面をさまざまと見せつけられる気がして仕しかつた。勿論こちらもご迷惑をかけているから決して腹を立てたわけではない。お

シユエケ邸と双壁をなす「門兆鴻邸」（異人館通り）



旧ハンセル邸と私

坂本 勝比古（千葉大学教授）

カメラ／緒方 しげを

それは今からもう二十年も前のことである。六月のある日、南フランスのモンテカルロから、モナコの切手が貼られた白い一通の角封筒が私の手元に届いた。それは私が秘かに心待ちしていた手紙であった。封を開けるのももどかしく、私は達者な英文で書かれたその手紙をむさぼり読んで感動したこと思い出す。

私の異人館研究のなかで、もっとも関心を寄せていた建物の一つがこのシュエケ邸であった。私にとっては旧ハンセル邸と呼んだ方がより親しみを感じるのであるが……。この建物こそは、神戸の異人館の生みの親ともいえるイギリス人建築家アレキサンダー・ネルソン・ハンセルの邸邸であった。

見るからに洗練された、しようしやなデザインの冴えをみせるこの建物は、神戸の異人館の意匠、技術水準の高さを示す代表的な建築ということができる。

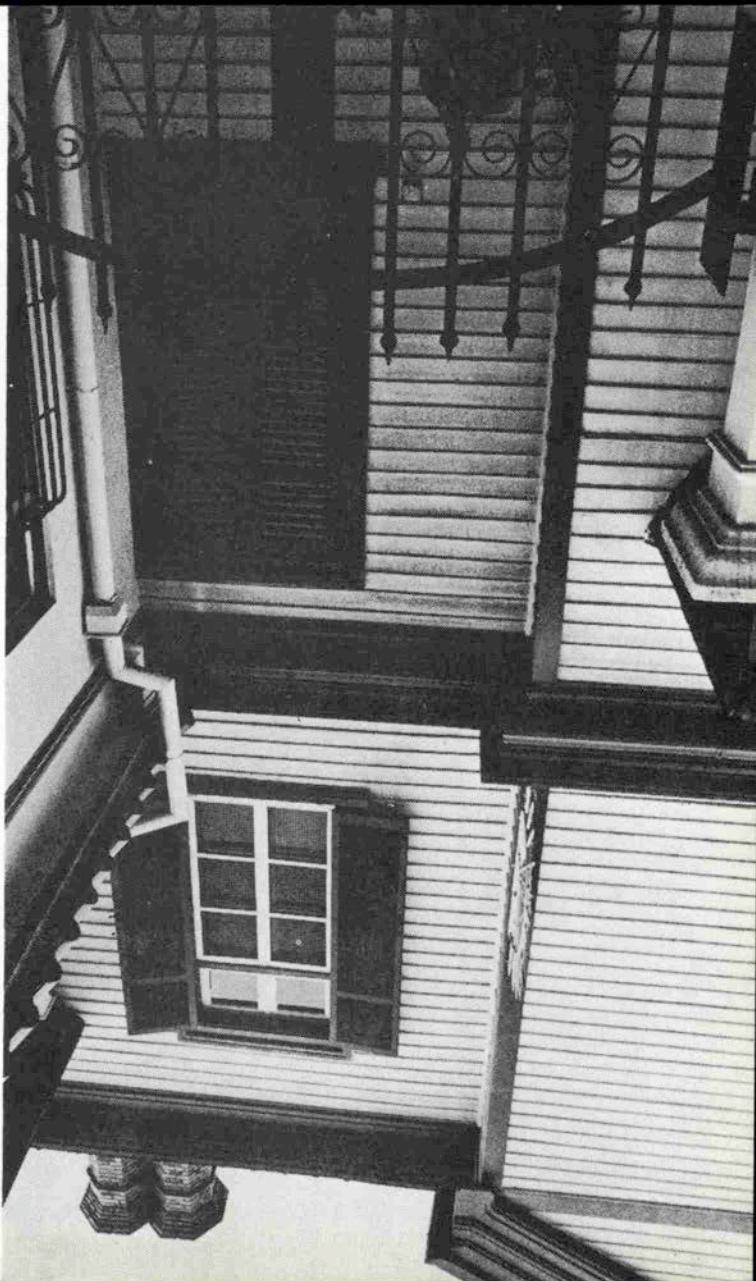
神戸の異人館の調査や研究を始めて間もなく、私はいろいろな文献のなかで出てくる A. N. Hansell F. R. I. B. A の文字に注目せざるを得なかつた。R. I. B. A は正式にいうと、Royle Institute of British Architects (英國王立建築士会) の略で、この会員となることは、建築家としての優れた資質をもたなければならぬものであるからであつた。そのなかでもフェロー (Fellow) の資格はさらに高い肩書きとされていた。当時日本での資格をもつ人はほかに、日本政府の招きで来日し、現

在の東京大学の前身工部大学校造家学科の教授であったイギリス人建築家として高名なコンドルだけであつた。

それ故にこれほどの資格をもつ建築家が神戸に住んで建築活動を営んでいたということは、非常に大きな意味があり、それだけにハンセルの人柄や経歴を知ることに少なからず興味を抱いたのであつた。そのうち神戸に住む外国人から、ハンセルの娘さんがモンテカルロに生存しているという耳よりな話を聞くことができ、早速問合せの手紙を出した。その結果、冒頭に述べたようにハンセルの娘さんから、大変嬉しい手紙を頂くことができた。

その手紙には、先ず“私の父のことを思い出して呉れる人が神戸にいることに感謝しています”という書き出しが、ハンセルの生い立ちや来日の時期、神戸での建築作品のことそして晩年のことなど、私にとって大変重要なことが詳しく記されてあつた。そして一枚の古びた建物の写真が同封されており、その写真はこのシュエケ邸の戦前の姿で、写真の裏に“私が子供時代を過した思い出の家”と書かれてあつた。

ハンセルは明治二十一年來日し、大正八年神戸を去るまで約三十年に渡って神戸に住み、その間数多くの異人館を設計、指導した。当時日本の近代化のなかで、神戸の町の発展や、国際性豊かな神戸の都市像の形成に、彼の果した役割は大きかつたといふことができる。



よみがえつた郵船寮

林田 重五郎（新聞記者）

カメラ／緒方 しげを

久し振りにボートアイランドへ渡った。

目の前にながめながら、ご無沙汰を続けた原因は、第一が戦前のみなどになじんだわれら旧弊人には、「税関構内」に入らねばならぬ、との感覚が、いまもって消えないこと。所持品の検査に会つたりすると、と昔と今を混同しておっくうがつてしまふ。

第二は帰りの足が心配なこと。バス路線があるが、今のところは間隔が広いらしい。歩いて神戸大橋をトボトボ渡るのでは大変だと思つてしまう。

渡つて見て、この二つが杞（き）憂だつたと知つたのは、うれしい収穫だった。三宮からタクシーに乗る。税関前もフリー・パス、いかめしい昔の構えもない。第四突堤の根元の複雑な信号で、しばらく待たされたほかは、スイスイ進めて二十分足らずで北公園の入口に安着したタクシー代わずか七百三十円で海外へ渡航したような、新しい風が心中を吹き抜ける。

数年前に来たときは、土の山だったのが、港湾施設も完成し、コンテナの整然とした列が見渡す限り続いている。五十二年の実績で輸出入貨物の四〇%、コンテナ一貨物の八五%を扱っているというのだから、びっくりするこちらがおかしいわけだ。

北公園はすばらしい。地表をレンガでおおつてある。元居留地の歩道に敷かれたレンガの足にあたる味を、いま復活して味う。レンガ敷きの公園は世界にあるまい。

イルカの噴水にみとれたあと、北に進むと「みなと異人館」の新鮮な姿が見えた。

◇

北野町の異人館に寿命が来て、多くは姿を消し、幸運な幾棟かが地元でそのまま修理保存され、次に土地が転用される一群が、あちこちへ移築保存されている。もちろん結構なことだが、マニアにとっては周辺の緑や風景と離れて再建されたその姿に、一種の寂しさを感じるケースもある。生まれ育った土地で、そのまま保存を：との願いが強い。

ところが、このみなど異人館の移築再建されたの目の前にして、これ以上の適地はない、エス・イー・ハイガーデン、旧日本郵船寮はよみがえつた、と感動した。移築先が適当な場所であれば、建物も再び生き続け新生する、との説に変えようとさえ思えた。

北野町四丁目にあったころ、有名異人館コースからやや離れた場所だったためもあって、あまり注目しなかつた。昭和三十六年以来、カメラを提げて何度も北野町を歩きながら、それらしいと思えるネガが一、二枚しかない。それが昭和五十三年「もとの面影を残しながら、使いやすいよう移築された」この場所で見ると実にすば

らしい。

まわりは世界一、いやアムステルダムについて世界第二といわれる大神戸港の港面である。すぐ東側に神戸大橋の赤、そして北方はるかに神戸市背山の緑、西に造船所のクレーン群、その中の港の中心に、白黄色のオイルペンキに輝くこの建物が位置しているのだ。北野町にあつたときより、ながめやすく格も上がつて見える。東側にヨロイ戸の窓六つ、南側に二つの二階部分。屋根にはあのレンガの煙突が望める。

レンガの門を入り、昔ながらの石段をあがつて中へ入る。無料。一階は喫茶室、コの字の逆型の階段を二階へ。一室は暖炉やイスのセットもそのまま、天井のシャンデリアが時代を教えて、なつかしい。一室に汽船のモデル、そして北側は異人館独特のベランダ。ここから望む神戸

の町の姿は素晴らしい。
階下のドアを押すと、これもレンガ造りのトイレ。ドアの金具も昔のものだろう。喫茶室ではコーヒーの注文に、一包の菓子がつけられる親切さ。コーヒーの味が思い出に残るほどになれば、再訪する人々はさらに増えよう。門の横に明治時代の黒いポスト。こんな港関係の古いものが多く集められれば楽しみが大きくなる。



帰途は近くにタクシーの列があつた。ポートピアの現場を回わつてもらう。三十一階のホテルの形ができ「新交通」の高架が長城のよう。すごい建設の熱気。そして四突根元の、あのネックでは貨車の入れ替えでしばしひトップ。だがこの異人館見物は、ほんとに楽しい一日になつた。



北野町から移築され、ポートアイランドを訪れる人に格好の憩いの場となつた「みなと異人館」

旧ハツサム邸

山田 幸平（大阪芸術大学教授）

カメラ／緒方 しげを



人にも運命があるなら、住居にも同じように運命がある。そういうことをみじみ感じさせるのが、旧ハツサム邸である。

晩春のある日曜日の朝、ハツサム邸のある相楽園を目指して中山手通りを西に向った。県庁を左に眺めて、相楽園の表門が近づくあたり、パリの近代美術館の界隈に心なしか似ている。総ケヤキ造りの表門をくぐると、左手に楠がのび、正面に石の大灯籠を開むようにして、黒ずんだ豪快な形の蘇鉄林が抜がつていて、この蘇鉄の向うに、緑色に塗られた木造の館がほの見える。それが旧ハツサム邸である。ごく普通の感覚を備えた人なら、この野の花のような趣を持ったハツサム邸が、明治後期

の日欧混血の様式を匂わせる豪奢な庭園と、どこかしらそぐわないことにすぐ気付くはずだ。とりわけ、ハツサム邸のむかって右側にあるドイツ風のおそらくは日本に二つではないと思われる厩舎と見比べたとき、この感じはさらに強くなつてくる。つよい固さを持つた蘇鉄の庭と、赤レンガで色彩のポイントを取つた重厚な厩舎と、ハツサム邸の素朴なたずまいとは異質のものである。

この邸は、英人貿易商ハツサム氏が明治三十五年頃、やはり同じ英人建築家の設計によつて建てたもので、もとは北野のパナマ領事館の近くにあつたと云う。細い柱のベランダ、ヨロイ戸、ゆつたりとした下見板などによつて構成されたこの住宅は、維新の開港時代の面影を残

すエキゾティックな洋風建築だ。そして、前庭の芝生に据えられた街灯もまた色どりを添える。これも明治七年に居留地の外人たちの手になつたもので、基台に彫られたロンドンの英字銘が、昔をしのぶよすがとなつてゐる。私は、ハツサム邸を眺めているうちに、二重写しのように、これらの蘇鉄と厩舎にふさわしい建築を想つた。

もともと相楽園は、元神戸市長小寺謙吉氏の先代が明治十八年頃から着手したもので、戦前には豪壮な本邸とその附属建造物が費をつらねていたと云う。それらは戦災で失われたが、たまたま私は大阪から博多の部隊に入隊する折り、汽車の窓から神戸大空襲の直後の模様をこの眼に收めているので、とりわけ感慨無量の境にある。

表へ出て左へ曲り、相楽園の東門を見ながら、北野の方角へ歩きかけたが、ふと思ひあたつて背後からハツサ

ム邸を眺めてみた。百米は優にある坪越しにみるハツサム邸と小寺厩舎とは、ただ屋根とその屋根を突き抜ける四、五本のレンガの煙突によつて、見事なアンサンブルを保つていた。相楽園の背後の道を東へとり、トア・ロードを左へ切つて東天閣の前まできて、ふと気付いたことがある。

それはつまり、この神戸の異人館にかぎらず、長崎や横浜などいわゆる維新開港にゆかりのある港の洋風建築には、西欧小説の名訳のようなゆかしさがあるということだ。表面は、親しみのある、美しい日本語で綴られてゐるから読むことはた易いが、なかなか構造まで手がとどかない。ハツサム邸など、材質は日本人に親しみの持てる木造だが、空に突き上げる煙突の異容によつて、さまざまの空想と幻想を誘つてくるのである。



相楽園内の「旧小寺家厩舎」「船屋形」と並ぶ貴重な遺産「旧ハツサム邸」は北野町から移築された。



'80 SERIZAWA SUMMER COLLECTION

風にも ときめきの香料が混じっている。
きらめく夏の、プレリュード。

協力/マキシン(帽子) 塩屋買入組合部



serizawa

本店 神戸市生田区三宮町3-18

お気に召すでしようか、この黒缶。

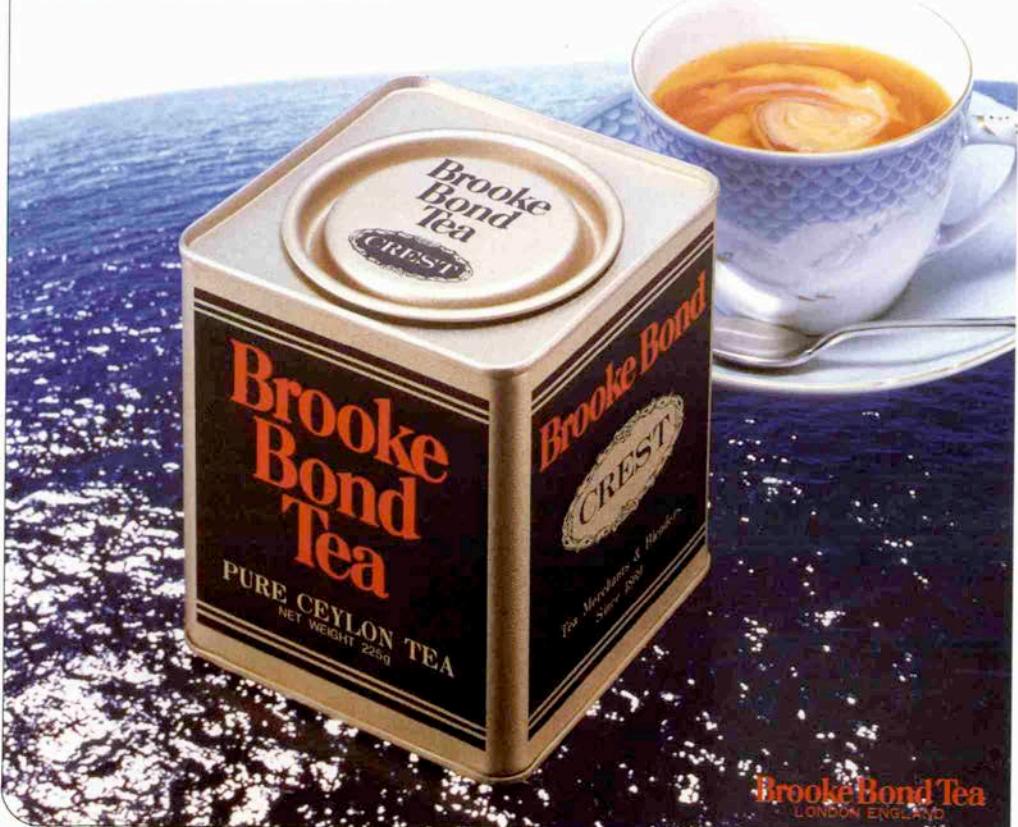
クレスト

紅茶にくわしい神戸のあなたに
まずお確かめ
いただきたいのです。
誇りいさか

ブルックボンド クレスト。

神戸ほど毎日の暮らしに紅茶がとけ
こんでいるところはない、ときいていま
す。それも英國流に濃いめのミルクチャ
ーとか。その神戸のあなたにぜひお確
かめいただきたいブルックボンド「クレス
ト」。セイロンティーの高地産だけをつ
かだれまでの同級品をしのぐ本格
派です。ミルクティーでお召し上りにな
ると(クレス)特有の香味が一段と冴
える、いわば「ミルクにまけない紅茶」
とも申しますか。

二三五g缶：標準価格一、四〇〇円



紅茶を超えた紅茶

ブルックボンドティー

クレスト

阪神・神戸地区限定発売

Brooke Bond Tea
LONDON ENGLAND

さわやかな夏の贈りもの…クール・デザート



全国各地への配達、低料金で承ります。

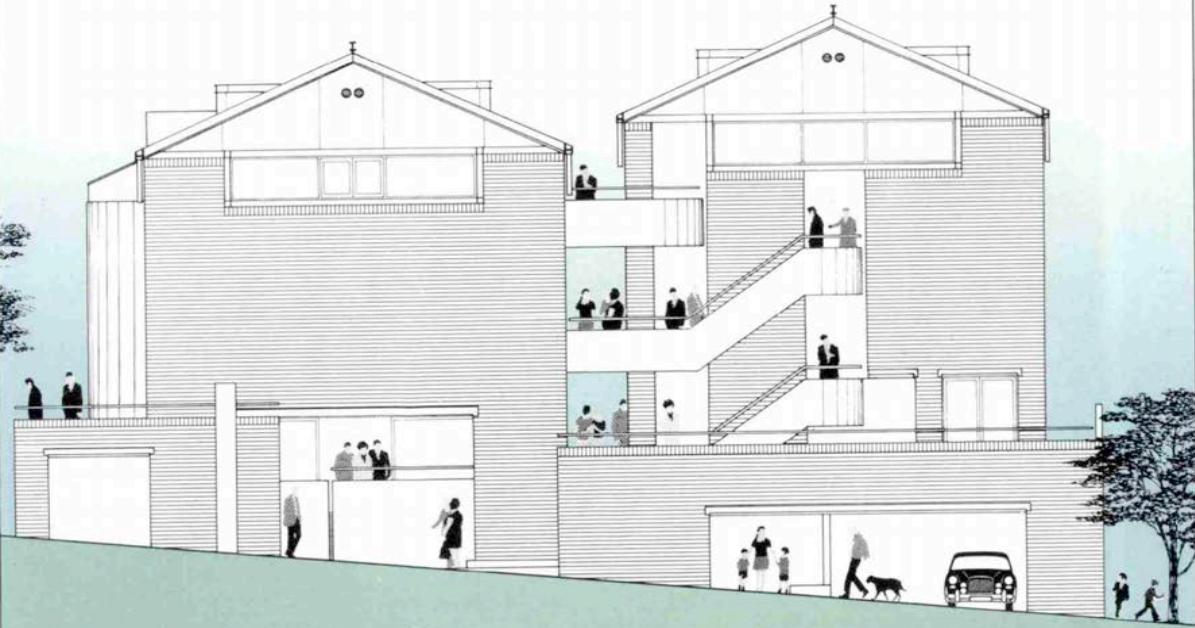
左よりクレール(フランス)、バーバラ(スイス)、シェリー(アメリカ)さん。お菓子が大好きな可愛いエトランゼたちです。

お菓子の
コトヅキ

本社=神戸市生田区北長狭通1-19
☎(078) 391-8681(代)

カメラ / 米田定蔵 撮影協力 / プティック魔女、大丸神戸店

RIN'S GALLERY



70年代ーRose Gardenをはじめとしてヤングたちのファッション界隈をついてきた“異人館通り”。
80年代、今一北野坂に、もう一つの流れを意識した新しい界隈、Rin's Galleryが誕生します。
エキゾチズムと高級な神戸トロードの格調を大切にしながら、ハイブローなアダルトやミッキーのための、リッチでエモーショナルな界隈がここに生まれようとしています。

北野坂に1981年4月オープン予定

リンズギャラリー
〒650 神戸市生田区北野町2丁目122番地
(北野坂)
〔お問い合わせ先〕

ローズガーデン有限会社
〒650 神戸市生田区山本通り2丁目106番地26号
TEL 078(222)1140

世界の一流品が揃った トアロード〈クロス〉



上段／白と紺のコンビネーション
中段／黒メッシュ
下段／白ハイヒール



スイスの手造りBALLYの
新作が届きました。このシ
ーズンはカジュアルでスポ
ーティーなデザインが豊富
です。

左の写真はパリーのステンドグラス

靴と舶来雑貨
クロス

本 店／神戸トアロード ☎391-1781
生 田 篠 店／三宮生田篠 ☎331-5983
さんちか店／レディスタウン内 ☎391-2562